



馬耳東風

危機管理

武漢がコロナ封鎖で困難を極めている頃、日本からの支援物資の宛名票の欄外に「山川異域 風月同天」の漢詩が添えられ大きく反響を呼んだ。「山と川は違っても、同じ風が吹いて同じ月を見る。」遣唐使の時代、天武天皇の孫・長屋王が鑑真和上に献納の袈裟に縫い付け、困難を乗り越え来日を決意させた（唐大和上東征伝）という。あわせて東京タワーも特別レッドライトアップに、スカイツリーも世界が一丸となってみんなで打ち勝とうと、地球をイメージして青色の特別ライティングに輝いた。過去と現代が苦悩を共有して心が繋がった光の連携だ。また、ブルーインパルスが初夏の都心上空を医療従事者へ感謝の6本の白線アクロバット飛行を、その後全国で祈りの花火が人々を笑顔にした。

WHOがパンデミックと認めた新型コロナウイルス（COVID-19）は、東京オリンピックの延期や世界の経済と日常生活を混乱させながら、人類へ猛攻撃を仕掛けている。朝日新聞「天声人語」欄に、ウイルスに詳しい日本獣医生命科学大・氏家 誠准教授の「王冠状の突起を何本も持つ円・円内の遺伝子Z」模式図と、「新しい宿主を見つけ生き残る本能活動」と紹介されたが、動物から人への感染について獣医学のウイルス研究は、重要な課題としてのしかかっている。当たり前になった地震速報は人工衛星で送信し、行政無線を自動起動する。馴染み深い警告音のチャイム音の後、繰り返し内容が放送される。豪雨の列島被害の拡大は、山崩れ現象によって泥や岩が泥水状に襲ってくる。特に人工造林地は、大

量の木材が滑り落ち家屋や橋脚を襲い堰となって水位を上げ水害に巻き込む。砂防ダムや溜池ため池を乗り越えてやって来るのが恐ろしい。ドローンの普及で剥きだしの山肌を近くから見ると、その現実味が鮮烈になる。国交省の今世紀末の降雨量予測は1.3倍、洪水発生確率は4倍と、さらに拡大化する。ゲリラ豪雨予測は、スーパーコンピュータを使った実測データとシミュレーションを融合する「データ同化」で信頼度が向上した。エリアメールは即座の対応に有効である。また、子どもらのGPSによる所在の確認に有用であるが、いわゆる盗撮が浮上した。監視カメラの普及は、解像技術の高度化に目を見張る進歩だ。カメラに見張られる監視が当たり前の社会になってしまった。無差別テロのカルト教団事件も終わると、教義・帰依と犯罪の過程がみえ難いようだ。宗教犯罪の核心が語られていないように思える。企業不祥事や医療過誤などのリスクは後を絶たない。政治がらみの行政のあり方も当然ながら姿勢が批判される。国境を越えた人々の行き交いや労働現場は事実上の移民国家のように見える。今回のクルーズ船から学んだコロナ感染症の脅威は、密室空間の怖さである。非常事態宣言に見る感染力の拡大が行動変容を起し経済後退は必至で、いかにして克服するか、動物分野の貴重な経験も参考になる。正しい情報で市民が行動しながら判断し、振舞う仕組み社会が強みになる。文明が生み出した都市の過密への反省が求められる時代だ。立ち向かう新しい就労形態や学習形態が工夫されてきたのも当然のことだ。ペットの同行避難が注目され国は「飼い主向け指針」を公表したが、「ウイズ コロナ」の複合危機を見据えた認知・理解の努力が求められている。（柏）